

つ
な
が
り

ま
ち
と

Sum⁰²

茨城県
東茨城郡
茨城町

Summer 2017



Sun⁰²

茨城県
東茨城郡
茨城町

Summer 2017

Contents 目次

- 03 特集 | まざりあう
- 潤沼にいきるもの -
- 07 人がつながる 潤沼がつながる
- 09 まちで暮らす人
まちを想う人
- 15 人と人をつなぐ
おもてなしのこころ
- ひろうらの田舎暮らし体験 -
- 17 連載 マチのケシキ
- 18 編集室から



Cover
写真 / アラタケンジ モデル / 松浦陽菜
“自然の中に身を置き、風と波を感じる”
桟橋にて表紙の撮影をしていると、どこからともなく白鳥の親子が！
せっかくなので、そのまま撮影に参加してもらいました。
風と、波と、白鳥と。
全てが奇跡的に合わり生まれたのが今回の表紙です。



霖雨がこの地を通り過ぎ
潤いを得た大地は
土の力をより強く引き出す

曇天の空から差す 陽の光が
鮮やかさと深刺さをもたらす
力強い緑と 揺らめくみなも
この地を訪れるもの 暮らすものすべてに
季節の到来を 告げる

Sun は
茨城町と ゆるやかにつながる

いくつもの縁を
人々の暮らしや情景と共に
綴り 伝えて行きます

生命がその息吹を紡ぎ育む上で

ある場所にとどまることを選ぶもの

いきるためにさまざま土地をわたり歩くものがある

とどまるもの わたるもの 二つの生命

それぞれが欠かすことのできない水の存在

丘陵地からゆるやかに流れる大地の水と

親潮と黒潮のまざりあった雄大な海の水が

八溝山地の終わり 東茨城台地の果てで 讃え合うようにまざりあう

山々から人里を下り 湖面を吹き抜ける風と

はるか遠い場所で生まれ 海原をわたり この地に届く風

生まれも育ちも違う 二つの風が出合い 結びつく

水と風 それぞれがそれぞれと まざり結びつくことで

この場所を見つけとどまり いきていくものには

自然に分け入る感動と 敬意をもたらし

風に従い 旅をするものには

やすらぎと 恵みをあたえる

根ざすもの - 旅をするもの

それぞれが出合い まざりあうところ

涸沼とはそんな場所なのではないだろうか

「涸沼」という名前はいつから？

常陸国風土記という奈良時代に編集された、茨城県
一帯の土地の暮らしを記録した本がある。この中で
“阿多可奈湖”という湖の名前が出てくる。諸説あるよう
だが、現在の涸沼が書籍で紹介された最初の例となっ
ているようだ。「アタカナコ」ではなく「アタカナノミナト」と
読むこの言葉、当時の涸沼は水の流れも緩やかで暖
かい湖だったようで、それが基となり“阿多可奈湖”となっ
たらしい。その後「蒜間之江（ひるまのえ）」、日沼、干湖、
現在もその名前が残る広浦と、さまざまな名前があった
そうだ。ただ、通称として「ヒルマ」の名前はずっと残って
いたようで、そこから「ヒヌマ」→「涸沼」と名前を変えて
いったらしい。名前の由来から当時の様子を紐解いてい
くと、水の流れも緩やかで暖かい、という点では、現在の
涸沼の様子は以前とそれほど変わっていないこと
なのかもしれない。またその時その時代の、湖と人々の
関わり方や捉え方、生活様式が名前にも表れていた
のでは、と推測できる。

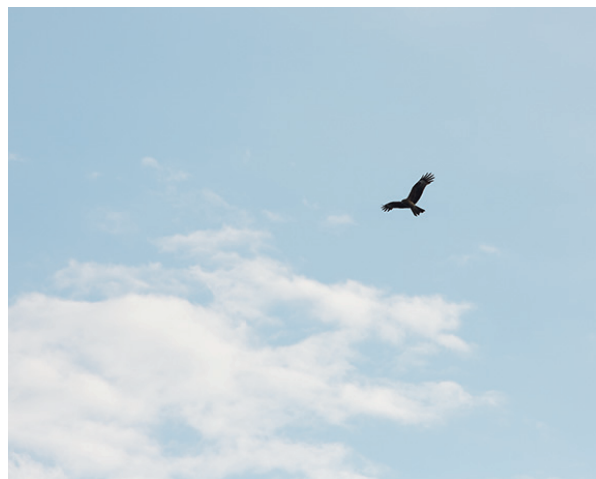


特集

まざりあう

— 涸沼にいきるもの —

写真 | アラタケンジ 文 | 石川 聖太 / 米村 優子



まざりあうところ

涸沼は、茨城町の東部に位置し、対岸の銚田市、東側の大洗町に面しています。

この湖の特徴は、淡水と海水が湖内でまざりあう汽水湖であること。全国的にも珍しく、海との距離が近いため潮の満ち引きの影響で水位の変動があり、一日二回、最大で四十センチメートルほど水位が変動します。

夜が明けて太陽が顔を出すころ、涸沼の湖面は夜の残り香を感じるような静寂に包まれています。湖上では風はほとんど吹かず、水面が鏡のように朝焼けの空を映し出し、不思議な風景を創り出します。しばらくその様子をぼんやりと眺めていると、湖面の静けさを切り裂くように、湖畔のほうぼうから一斉に漁船が発航し、湖の東側にあるシジミの漁場を目指し始めます。太陽が高く昇り海からの風が湖に届き始めるころ漁は終わりを迎え、その風を待っていたかのように三角の帆を立てたウィンドサーファーや、風をつかまえて湖上を飛ぶ鳥たちが目立ち始めます。湖内に棲む魚の種類も一〇九種類と多く、海の魚と川の魚が混在しているので、鳥たちの格好の餌場にもなっています。またニシンの太平洋側の南限にもなっていたこともあり、ニシンを追ってオットセイが見せた記録もあります。

根ざすものと旅をするもの

涸沼ではこれまでに湖畔に巣を作る鳥や、季節によって渡ってくる鳥たちを含め二二〇種類が確認されています。その中でも旅鳥と言われるシギやチドリは、夏はシベリアやアラスカ、冬はオーストラリアやニュージーランドなど実に一万キロメートル近くの旅をし、その旅の途中に涸沼に立ち寄ります。湖のほとりに群れて羽を休めているその姿を見かけると、疲れを癒し、互いに目的地へ向かう旅の安全を祈りあっているようにも見えてきます。冬になると遥かカムチャッカ半島周辺から二羽のオオワシがやって来ます。越冬のために南下する場所として北海道近郊が一般的なのですが、本州で冬を越す個体も少数いるそうです。一羽のみで自由気ままに行動するその姿は、『かもめのジョナサン』のような孤高の存在であるかのように思えます。

自然との距離感

湖畔を周回してみると、湖岸の地形が手つかずのまま残っている事に気がつきます。湖岸と道路の距離が平行して曲がり道が多いのが特徴で、緑に包まれた緩やかなカーブを抜けると、突然目の前が開け湖が現れます。足元をカニの親子がカサカサと横切ったり、水面ではボラが勢いよく飛び跳る様子が見られたり、白鳥の親子がひよこりと顔を出したり。自然との距離がとても近いところだと実感します。

人間がみずから自然の中に入っていき、自然が持っている心地よさや不便さを理解し、受け入れて暮らす。そうする事で風の音、水の揺らめく様、陽の光が持つ心地よさを感じる事ができる。そんな感覚を心から実感できる数少ないところなのではないでしょうか。

人がつながる 瀬沼がつながる

広浦屋 主人 | 長洲 秀吉



朝風に包まれた湖面で漁船のエンジンを切る
と、日常の喧騒が届かない静寂に包まれます。
時折聞こえてくるのは、湖面を飛び出す魚の
音、上空を過ぎ去る鳥達の鳴き声、そして水
揚げされた魚が元氣よく跳ねる音。潮の満ち
引きで表情を変えるゆるやかな波は、舟を
ゆつくりと優しく揺らします。今日獲れた魚を
使い、どんな料理でお客様をもてなそうかと
思い描きながら、家族が待つ湖畔に帰ります。
家業の一つである漁業を引き継いでから四半世
紀近く、毎日繰り返し返されてきた朝の風景です。

「瀬沼は静かである。のんびりしていて、豊
かなものをたくさん持つてる。外での暮らしや
仕事を知ってるからこそ、わかるんだよ」
人との繋がりが、人生で何よりの財産。みん
なの喜ぶ顔が見たくて、時には大盤振る舞いし
過ぎてしまう事も。気持ちが大きく快活で、
小さな事にこだわらない性格だから、いつも周囲
は人が絶えません。前職の自動車関連会社時
代の経営者仲間や取引先、同じ瀬沼湖畔で店
を営む仲間達、「田舎がもう一軒できた気分」
と足繁く通う全国各地の方々。こっそりお忍
びでやって来る芸能人やスポーツ選手もいる
とか。皆をいつも温かく迎えてくれる妻の良
子さん。お手製の郷土料理や魚料理はとても
美味しいです。

「ほうぼうから人がやって来ても、地元の人達と
の交流がなければ、それっきりで終わってしまう。
損や得は二の次で、まずはコミュニケーションを取
りたい。繋がりを大事にすれば、人つて自然に集
まってくるものだよ」

約二十年前、近隣の大手企業や公的機関の
団体が頻繁にフィッシングに訪れていたのを機に、
近所の釣り船業者仲間たちに声をかけ、屋
形船を始めました。これもひとえに、自然豊か
な瀬沼を愛し、外の人々とのまざりあう場をつ
くるために考えた事。前職の時からずっと温め
ていたアイデアでした。

「二人ひとりの心が通じ合い色々な事が出来
れば、もっと人々と賑わう湖になると思うよ」
二〇一五年、瀬沼はラムサール条約登録湿
地となりました。長洲さんは屋形船だけでなく、
遊覧船の運航などがあればいいのではと、
独自の交流のプランを日々考えています。まだ
見ぬ人との新しい出会いを思いながら、瀬沼に
新たな風を吹かせ続けています。●

ながすひでよし 広浦屋店主。1943年瀬沼湖畔で半農半漁を営む長
洲家の9人兄弟の8番目として茨城県石崎に生まれ、専門学校卒業後、
都内の大手家電メーカーに就職。その後故郷に戻り、大手自動車メーカ
の道へ、25歳で板金工場を構え独立し、35歳から車検のテスト場を経営。
40代から本業の傍ら父の漁を手伝い、55歳で家業を受け継ぐ。現在は漁師、
屋形船や釣り船業、宴会場の経営、茨城町のホテル・ツアーガイドを担う。

まちで暮らす人 まちを想う人

長洲恵美 Prava dream 主宰

Feeling's
Thinking

後悔のない人生のために

まちで暮らす人
Prava dream 主宰 長洲恵美

For regret-free life

長洲さんは一九八〇年茨城町長岡生まれ。現在も同町在住。一八歳で結婚、三人の子育てや祖母の介護、仕事にと多忙な日々を送る中で体調を崩してしまい、それがきっかけでアロマセラピーとヨガに出会いました。現在はアロマヨガの教室 Prava dream を主宰。アロマセラピー講師・ヨガインストラクターとして女性達へ癒やしと笑顔を届けています。

心のままに、自分で決める

幼少期は割と活発な方だったと思います。兄とその友人と一緒に男子の遊びをしたり、近所の駄菓子屋さんに行ったり。小学校高学年になると、友達と自転車で近所を走り回ったりしていました。中学時代の私は思春期の真っ只中で、正に心のままに過ごしていました。たとえ先生や大人たちに何を言われようと、自分の事は自分で決めて行動していました。その様子が同級生には自由に映ったのか、「カッコイイ」「その生き方を貫いて」なんて言われた事もありました。高校も最初から行く気は無く、親にお金を出させてまで勉強をするなら、早々に自立したいと思っていたので、入学して一週間で高校を辞めてしまったんです。親には結果的に色々心配をかける形になったので、色々な所でバイトをしながら、生活費を家に入れてました。

そんな時、中学時代から付き合っていた彼、つまり今の夫との結婚が決まり、結婚式の準備をしている最中に長女を授かりました。成人式の時にはすでに次女がお腹にいて、その二年後に三女が生まれ、あつという間に五人家族になりました。よく「もつと遊びたかったんじゃない？」なんて言われますけど、家庭を持つ事が夢だったので、あまり思いませんでした。一歳上の夫は働き始めたばかりでしたし、子供と遊べる所も今より全然少なかったもので、毎日毎日ベビーカーを押して散歩に出ていました。当時は実家の目の前に住んでいたのですが、子供を預けてまで何かした

いとも思わず、とにかく家庭を第一に考えて過ごしてきたんです。

その後、三女が幼稚園に入ったのを機に、ショップ店員のパートを始めたのですが、同じ頃に祖母の体調も悪くなってしまい、合わせて介護もする事になって。急に忙しくなったから無理がたたって、身体を壊してしまいました。通院をする中で、このままじゃなく何かをしなければ…。そう強く実感したんです。そんな中、親族がアロマセラピーに関連した仕事をしていて聞いて、少し興味があつたので色々調べてみると、とても奥が深く面白そうに感じたので独学で勉強を始めました。それがきっかけで色々な事にも興味が湧き、その中でも五千年の歴史をもつインド・スリランカ発祥の伝統医療「アーユルヴェーダ」を知り、それにはヨガが深く関係している事がわかり、それを機にヨガにもめり込んで行きました。心身の癒しと健康、その二つを合わせた、自己治癒力を高めメンタルも整えてくれるアロマヨガを追求してみようと思ったんです。



身体と心を助ける

二〇一〇年にアロマセラピー検定一級に合格した後、アロマやヨガのインストラクターの資格を次々と取得し、早々に自宅の一角で教室を開いたんです。一人ひとりの身体の状態に合わせて適正なポーズを選ぶ少人数制で、みんなが笑顔になれる場所を作れたかった。日本人って頑張りすぎなんです。頑張ればいい仕事が出来ると思ってた無理をしていると、私のように体調を崩してしまう。アロマヨガを通じて、私と同じような境遇に陥った人を助けたいんです。

十代の自分が見たら、想像できない人生を歩んでいると思うでしょうね。私が人に何かを教えているなんて。自分に正直に、どんな事でも諦めないでいけば、叶わないと思う事だって叶うんだ、と私を見て感じ取ってもらえたら嬉しいんです。人って、いつどうなるかわからないし、思ったらやるかやらないかのどちらかで。私は自分で何でも決めてきたので、過去に後悔がないんです。

どの世界にでも、上にはすごい人がいくらでもいるので、肩肘を張らず、自分の知ってる範囲でやればと思っています。アロマヨガの敷居を下げて、気軽にチャレンジできる環境を整えて、自分も学びながら続けていきたいですね。もちろん家庭の事が今でも最優先。そういうスタンスじゃないと、またストレスになってしまいますから。一時期はどん底を味わいましたが、良き先生や仲間達との出会いもあり、今がある。あの経験があつて良かったと思ってる位です。

昔ながらを活用し、交流する

この町って自然が豊かで住みやすいと思うんです。私は町外に住んだ事は無いですが、本気で出ようと思つた事はないんです。なので比較はで

きませんが、元々騒がしい所は好きでは無いですし、生活するには持つて来いの場所なのではないでしょうか。ただ、新しいものを取り入れにくく、古い慣習が色々な所に残っている。一見デメリットに見える所を逆に利用すればいいと思うんです。昔ながらの肥沃な田畑で育つた野菜でグリーンスムージーを作り、都会の人々に堪能してもらったり、癒やしや自然を感じて貰うイベントを仕掛けたり。都会には情報に前のめりになりすぎて、

疲れている人が沢山いる。私の教室でもそうですが、住んでる場所から遠くても、いいなと思えば、また来てくれるんですよ。それ、おばあちゃんの知恵袋もたくさんあります。私自身、庭でハーブや花を育てているのですが、ちょっとした栽培のコツや土作りなんかを知りたくなる。そういう知恵を町のおばあちゃん達は持つてるんですよ。尊敬しちゃいます。梅干しだったり、干し柿だったり、作り方はインターネットで簡単にわかるのかもしれないですけども、実際に作っている人に聞くのが一番。地域ならではの作り方もあるのかもしれないし、そういうものを若い人に繋げていければ、みんながやりがいを持つて生きられるんじゃないかと思っんです。そういった茨城町の知恵を活用しながらこれからも受け継いでいきたいですよ。



各々の自分だけの場所

まちを想う人

Lab.kenbee 67 代表 Kenji Matsushita

Each place of
your own

Matsushitaさんは一九六七年宮崎県は日南市生まれ。生まれてすぐに東京都東大和市へ転居し、二〇二二年から茨城県水戸市に在住。日本デザイン専門学校(現 日本デザイン福祉専門学校)卒業後、アミューズメント会社、工業製品メーカーを経て、現在はLab. Kenbee67の名義でイラストレーターとして活躍中です。

音がある暮らし

生まれてすぐに移り住んだ東和は、多摩湖や西武球場が近くにあつて、街と豊かな自然がバランス良くある恵まれた地域で育ったんです。昼間は外で遊びまわり、夜は部屋で絵を描くのに夢中でした。小学二年生の頃、兄が聴いていたのがきっかけで音楽に没頭しました。洋楽を中心にカッコイイと感じるものは貪るように吸収し、四年生の時に念願のギターを手に。その時はすぐに挫折したのですが、中学生になり本格的にギターに火が付いて、高校はハードロックのバンドを組んだりしていました。高校は福生の米軍横田基地の真横。この当時の福生はアメリカの雰囲気の色濃く街に漂っていて、その時にかっこいいなあと思った看板のデザインやプロダクト・ファッションは今でも作品に強く反映されています。

やりたい事が決まらず、熟考して入ったデザインの専門学校が楽しい所で。バンドをしたり日々遊びつつも、相変わらずやりたい事が定まらないまま卒業制作展を迎える事に。そこで僕の作品を見かけた会社の方からスカウトが来て、そのままさんなりと社会人の仲間入り。万博などのイベントや遊園地などの企画、ディスプレイ制作など手広く手掛ける会社で、デザインから現場監督に至るまで色々と経験させてもらいました。並行して音楽も途切れずに続けていて、ほとんど寝ないでロカビリーやロックンロール系のバンドもやっていました。その後好きな音楽を辞められず仕事を辞め、イラストの仕事をしつつ、配管工をしながら音楽をという日々が続きました。

しかし、自分よりもレベルが高い仲間達がプロデビューしても、目の目を見ない人も少なく無かった。それを見て、プロにこだわらず、やりたい音楽で活躍してる仲間を見て考えを改め、全く畑違いの会社で普通の社会人に戻ったんです。そこでパソコンを覚え、イラスト制作もデジタルに移行できた収穫もあったのですが、一人前になった途端、思いがけず体を壊してしまっただけがきっかけで約七年のサラリーマン生活を終わりにしたのです。そこで気持ちも生活も切り替えて、自分の事務所を創設しました。そして本腰を入れてイラストレーターとしてのキャリアをスタートした訳です。

別世界に誘われる

以前、霞ヶ浦に釣りに出掛けた事があつて、印象には残っていたけれどそれっきりで。その後、彼女の出身地である水戸に一度行く機会が出来て、周辺を案内してくれた事があつて。その時に訪れた涸沼が一発で気に入ってしまった。地平線や空の広さ、光のない深い夜空は都内では絶対に見られませんし。そんな矢先にまた仕事で体調を崩しまして。療養も兼ねて茨城に行こうと二〇二二年に移住を決意したんです。

キャンプ暦は三〇年以上になるでしょうか。高校の時に友人に誘われてから、毎年欠かさず続ける恒例行事になっています。今では一人でふらりと行ったり、道具をカスタムしたり、ハンドメイドでルアーを作ったりするのも楽しみの一つです。これまで各所を訪れていますが、涸沼は他とは違う感覚なんです。移住してから五年程通っています。道中の湖岸や田畑・林道…まるで別世界に誘われるような感覚がありまして。茨城町って良くも悪くも交通量が少なく、自分だけが知っているとっておきの場所感が強くて。県外の友人たちをこちらに招く時は、大抵親沢公園でキャンプをするんです。一度キャンプをした後、全員がいい所だとリピーターになりました(笑)。一回のキャンプで三泊ぐらいするのですが、買い出しが無い日は朝からビール



を飲んで、気の合う仲間達と湖畔ですっと喋りつばなし。それが最高なんです。涸沼って、朝日と夕日が同じ湖越しに見られるんですよ。夕日が綺麗なのは知っていたんですが、朝日が湖畔から昇った時は、感動のあまり皆を叩き起こしました。あれはキャンプをしなれば知り得なかつた景色です。

大切な場所

何年前かに、相模湖近くにある床屋さんのプロモーションビデオを作った際に、先ほど出た涸沼への道中で感じる空気を盛り込んだんです。結果、その仕事は大好評でした。僕の中で、涸沼が仕事で生かされた具体的な一例ですね。キャンプで見た景色はどれも普遍的で。木の枝ぶりや向き・生え方、刻々と変わる空の色合いやコントラストの美しさ…、自然がそうである理由が手に取るようにわかってくる。自然の流れを汲んだものって機能美が備わっていて、創作の参考になるんです。そんな訳で僕にとつて涸沼は、良いギターと同じくらいの価値を有しているんですが、地元の人々はあまりこの自然を意識していないみたいで…。なんて贅沢なんだ、と驚いてしまいます(笑)。涸沼は僕を癒やしてくれる大切な場所。ポテンシャルは相当高いものがあるし、僕自身毎回発見がある。一人ひとりが自分だけの場所と思える、そんなスポットになつていけばいいのではないのでしょうか。



人と人をつなぐ
おもてなしの
ところ
ひろらの
田舎暮らし体験

写真 | 石川聖太 文 | ホシカワリエコ



今年で三年目を迎える町の農家民泊。ひろらの田舎暮らし体験推進協議会が中心となり、学生の『田舎暮らし体験』や『農漁業体験』の受け入れを行っています。

昭和三十年代ごろ、水浴びや釣りに訪れる人で賑わいのあった涸沼のほとりの広浦地区。今では少子化で学校統合、子供は独立し、広い家におじいちゃんとおばあちゃんだけになった家庭が増え、『活気をなくしたこの地域を再び賑やかに！』という思いのもと農家民泊は始まりました。孫を迎えるような気持ちで学生を受け入れ、楽しく過ごすことができたなら、おじいちゃん、おばあちゃんも若返って生きがいにもなるのでは、と考えたそう。

手さぐりのコミュニケーション

農家民泊には海外からの学生が参加することも。一体どんなコミュニケーションをとっているのでしょうか。受け入れ家庭の方は英語に堪能な方が多いのかと思いきや、意外にもカタコトの英語、漢字で筆談、日本語とジェスチャー、!?など、みなさん工夫して交流しているようです。生活文化が違うのでちよつとしたハズレも。例えばトイレ。日本ではトイレレットペーパーは水に流すのが一般的ですが、アジアの一部地域では水に流さず併設のゴミ箱に入れる文化が。ペー

パーをどうしたらいいかわからなくて聞きに来ただけで、最初は何に困っているのかわからなくて身振り手振りの訴えでなんとか理解して『そのままジャーツと流して！』と使い方を説明したりね(笑)。文化の違いを感じる人が多いけど、お互いに勉強になりますねと受け入れ家庭の宮部忠男さん。

また、台湾からの学生は、靴を脱いだ後きちんと揃えたり、食事の後はみずから食器を下げて洗うなど、すすんでお手伝いしてくれたりそう。「日本の家庭はきちんとしているからと日本のマナーを事前に勉強して実践している姿に感動しちゃって。受け入れ側も勉強しないとイケないね。私たちの方が襟を正さなきゃなど。これはいい経験になりました。」

伝えたい町の魅力とは

訪れた学生に伝えたい町の魅力をお聞きすると「この地域の人にしかわからない自然の魅力、空気感を伝えるのは難しいね」とみなさん。「茨城町はどこに行っても畑や田んぼの田園風景で同じでしょう？でもここには涸沼があって、森があって、水田があつて。今の時期は田植えが終わった後で真っ青できれいですよ。それを見てもらうためにサイクリングに連れ出すこともあるの。自分が好きだなあと

思っている、自分だけが知っている場所に学生たちを連れて行きたいな」と協議会会長の清水勝利さん。

お別れのとき

各家庭で学生と一緒に過ごす時間はたったの二泊、二泊と短い事が多く、あつという間に過ぎていきます。最終日、学生と受け入れ家庭が集まりお別れレモニーが行われます。言葉が通じない、でも感謝の気持ちをなんとか伝えたい…もどかしくて言葉にならない想いがあふれるのか「アリガトー!!」とあちこちでハグし合い、涙を流して別れを惜しむ姿が…。「十年くらい経って彼らが大人になったときにね、昔、茨城町というところに行つたね、と思いついてくれるだけでいいと思ってるの。茨城町はいいところだったなあって」と宮部さん。

農家民泊を通じて国や文化、世代の壁を超えて

まざりあうコミュニケーション。この地域でしか味わえないすばらしい自然と笑顔あふれるおもてなし。言葉が通じないから円滑なコミュニケーションとはいかないけれど、お互いが歩み寄り、思い合う。そしてあたたかな心の交流やつながりが育まれ、人や地域、そして町がいっきと豊かになっていく…そんな新たな取り組みが始まっています。●



15,16ページで紹介した、ひろらの田舎暮らし体験。
取材をさせていただいた
ブーケット・ラバチャット大学(タイ)と茨城大学の学生の皆さんです。
円滑なコミュニケーションとはいかないけれど、
国や人種、世代の壁を超えたあたたかな心の交流や
つながりの様子を感じていただけたかと思います。
受け入れ家庭と学生たちの様子や、
農漁業体験、お別れセレモニーの様子など
掲載しきれなかった内容を、後日WEBサイトにて
“ひろら田舎暮らし体験レポート”として公開致します。
お楽しみに!!

From Sun -編集室から-

Sun 第二号をお届けします。

涸沼は「茨城町の見どころは?」と聞くと大抵答えとして出るくらい、町民と関わりが深い場所。もちろん昔から知っていましたが、最近ふと高台から涸沼を見て、光と水と緑が混ざり合う景色の素晴らしさに改めて感動しました。今回の記事で皆さんが少しでも涸沼に興味を持ち、行ってみようかなと思ってもらえたら何よりです。[がっさー3] / ひろら田舎暮らし体験推進協議会の農家民泊の別れの日。「また会おう。」と地域の方と宿泊した学生が涙を流し、抱き合うシーンを目にしました。人と人とのつながりに国境はないと感じられた光景でとても感動的でした。あのシーンを見たら受け入れ家庭になってもいいなあ…なんて思ってしまうかも。[243] / 今回の特集は「涸沼」。涸沼といえば数十年前に家族で涸沼に釣りにいった時に兄の釣り竿に釣られたことを思い出しました。涸沼川でワカサギが大量に釣れたのでフライにもらって食べたことを思い出しました。でも今は大人になったのでボラの刺身と白米が最高です。そろそろ丑の日。涸沼の天然ウナギは最高です! ドローンで上空から撮影していると「涸沼っていいところだなあ〜」とつくづく思います。これからもガンガン飛ばしますよ! [ふぁんとむ3] / この「Sun」は実はサポーターさんの力によって作られています。いきなりの取材依頼や撮影協力にも快く承諾してくれる心優しい皆さん。感謝でいっぱいです。そして次は「あなた」をお願いするかもしれません! その時はよろしく願いますね。[クロ73]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしていきます。

いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト www.town.ibaraki.lg.jp/iba3

次号は、2017年11月発行予定です。

Sun 第2号 夏号 2017年8月1日発行

企画・発行: いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
[茨城町 町長公室 秘書広聴課]
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL: 029-240-7126
MAIL: iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン | i,D
取材・執筆 | 米村 優子 ホシカワリエコ 石川 聖太
写真 | アラタケンジ
イラスト | Kenbee67
印刷・製本 | 株式会社光和印刷
本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

Special Thanks
社会福祉法人 親愛会 [表紙] 松浦陽菜さん [表紙]
ひろら田舎暮らし体験推進協議会 [特集]



“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は、
いばらきまちが考えるあたらしくて
ゆるやかなつながりの場です。
まちとのつながりをみんなで共有し、
魅力・風景・楽しみ方を見つける活動
をします。ご入会された方には、素敵な
サポーターズグッズセットをプレゼント。
ぜひご入会ください。

お申し込みはこちらから
www.town.ibaraki.lg.jp/iba3

“いば3”ではサポーターを
募集しています!!



QRコード



広浦地区のあんばさま。
湖畔がとても不思議な雰囲気にも包まれる。
外国人はこれを見たらとても喜びそう。



小鶴の祇園祭。祭り当日になると
商店街はどこからともなく来る人で溢れかえる。



小堤地区の盆綱
地藏様の周りに「ナーマードンボ 爺のれ 婆のれ」と
声掛けしながら三周まわって綱を置いておく。

はじめとした梅雨が明け、本格的な夏を迎える頃、町内では色々なおまつりや盆行事などの風習を見る事ができる。七月の海の日前後に行われるのが、小鶴地区の祇園祭。担ぎ手によるお神輿や子供神輿、山車(だし)が地区内を練り歩く。この日になると町中から人がどこからともなく集まり、商店街が人で溢れかえる。僕は子供の頃このお祭りに毎年出ていて、普段は怖い顔のおじさんや大人達も、お祭りになると心から楽しそうに笑っていたのを思い出す。

その後、七月の終わり頃に広浦地区では「あんば祭り」が行われる。このおまつりは、山車の代わりに、舟山車と言われる船の舞台で、狐やひょうとこが踊る全国的にも珍しいお祭り。夕闇の湖上をまったりばやしとともに舟が進んで来て、湖面に船が並ぶ様子はとても幻想的で、まるで空を飛んで来る聖霊のようというか、不思議と妖しささえも感じさせる。

お盆の頃になると、小堤地区などでは「盆綱」と呼ばれる行事が行われる。八月十三日の朝に地区の子供たちが神社で綱をつくり、それに仏様が乗り、子供たちみんながその綱をもち、各家庭をまわり仏様を下ろしていく。一口に風習と言っても、私たちが知らない古来から続いて来た物が沢山あり、それらとても不思議に映るものだなあと思う。



茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である澗沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です